



SPACE No.31

日本臨床心理身体運動学会会報第 31 号 2014 年 11 月 11 日

編集発行 日本臨床心理身体運動学会 会長 山中康裕

3 月の講習会・研修会に参加して

びわこ学院大学 奥田愛子

3 月の講習会・研修会は大阪創元社ビルで開催されました。久しぶりに見る梅田の街は以前とは大きく様変わりしていて、私の知らない顔になっていました。

午前の研修では、鈴木先生より身体症状・反応の心理学的意味について、事例とともにご講義いただきました。カナーの症状論をもとにした、競技成績等の出来の悪さやスランプ、身体の症状として見えているものは、真の問題や課題への入り口でしかないこと、そして怪我や痛みはそれら真の問題や課題がどこにあって、どんな状態かを知る手がかりとなる一方で、それらがこれ以上悪化しないための安全弁、あるいは超えてはいけない壁となってもいるといった内容からは、聴き手である治療者としての力量を考えずにはいられませんでした。ご紹介いただいた長期におよぶ関わりの事例は、クライアントにとって大切な競技生活の時期に寄り添われたものであり、先生ご自身にとっても大切な事例の一つではないかと想像しました。期間中、クライアントが訴えた痛みのストーリーも命の語りのように、先述の思いをより強くしました。

続く午後の事例検討の中でも、思い（重い）が身体症状となっているといったことがテーマだったかと…調子が悪い時の変動の大きさ（低い水準）を、クライアントは“鉛のように重くなる”と表現するとともに、そうして抱えた問題に“なぜ自分がそうなるのか、（そして）何をどうしたらそうならないのか”と。これらの訴えは、LMT の特徴的な彩色の仕方と重なり、私には、今後、セラピーを通してクライアントご自身が納得できる物語づくりを継続されていくように思われました。事例をお聴きしながら、クライアントのストーリーに治療者が丁寧に添っているという印象を持つとともに、さまざまなコメントのうち、特にクライアントの言葉の端々までをよく吟味することがとても重要だということがこころに残りました。

さらに、ここまでの研修ですでに飽和状態になったアタマを叱咤激励して、中島先生の心身問題と心理臨床というテーマでのご講義をお聴きしました。正直なところ、先生のお話の内容が私の理解の壁を超えていて、安全弁が働いてしまっていました（笑）。浅い理解

での所感になるのですが、見えないものを見る、というよりも見えないものを見たいという衝動は、それほどまでに無意識の世界が魅力ある存在であること、ただし、見えないものに触れるためには、そのための儀式や作法（技法）や訓練が必要であるというお話からは、自然科学の手法では到達できないその深い世界を理解するために必要十分な臨床トレーニングの大切さを痛感すると同時に、自分自身がそうした世界に惹きつけられたことを再認識いたしました。

研修会が終了した頃は、すでに黄昏の時も過ぎていました。今回もアタマだけでなく、こころもいっぱいになって帰途につきました。次回の研修会も心待ちにしています。ありがとうございました。

第 49 回学会研修会と学会への雑感

佐渡忠洋（常葉大学）

2014 年 6 月 8 日に東京で開催された研修会では、高橋幸治先生が事例をご発表くださいました。高橋先生の事例を拝聴する機会とは、私にとっては、布置に対する自らの位置や姿勢を問われる時間になることが多いように思います。これまでも今回も、そう経験してきたという後味があります。今回、発表された事例では、クライアントへの細やかな配慮が、ごく自然に綿密になされていることが意識でき（多くの場合、これらは文字になりませんが）、こうしたコミットメントがしっかりあってこそ、布置というパースペクティブが生きてくる、と思えたことが私には収穫でした。本学会員の多くの方にとって、これは当たり前なことなのでしょうが、頭でっかち症候群の中にあると、どうも本当に大切なことを見失いがちになります。事例を聴き、その世界にできるかぎり身を投じることが持つ可能性は、大きかったです。

この発表の指定討論者は中島先生と名取先生でした。中島先生はコメントの最後に、“発達障害”への新しい捉えを示唆されました。時間の関係で、詳しくお聞きできなかったのは残念です。学会のワークショップや資格講習会などで、またその論に触れる時間があれば嬉しいです。名取先生は、事例理解において、グリム童話の「鉄のハンス」(KHM136)を挙げながら、別の位相へと導いてくださいました。先生の語り口調なども相俟って、その旅は非常に心地よいものでした。東洋・西洋のお伽話に関する先生のワークショップなどがあれば幸せだな、と感じています。

先日送られてきた学会誌が新しくなっていました。その雑誌を読んで本棚に収めようと、代わりに手に取った書籍の中に、山中先生の論文が収録されていました。1994 年、本学会が立ち上がる前に著されたこの論文には、今後期待される心理臨床の分野として「スポーツ臨床」が挙げられています。この 20 年で「スポーツ臨床」はどのように変わったのか、さらには本学会が冠する「臨床心理身体運動学」がどのようなものか、今、自分のこととして私は考えています。何か明確な到達地を設けて進まないことが本学会を好きな理由の 1 つなのですが、上のことと関係して、今の国家資格の動向に対し、事例研究と臨床実践をもっとも尊重する本学会は、何か明確な声を上げるべきだと感じています。会員の中に

はいろいろなご意見もおありでしょうが、自身のアイデンティティを心理療法家に求める（求めたい）以上、私は反対したいのです。

まとまりのない文章になってしまいました。

12月の学会で皆さんと会えることを楽しみにしております。大会実行委員長の坂中先生、大会実行委員の諸先生方、お体を大切にしてください。

山中康裕（1994）臨床心理学の未来. In ; 河合隼雄・山中康裕（編）臨床心理学入門（こころの科学増刊）. 日本評論社, pp.169-172.

編集後記

SPACE 第 31 号をお届けします。本号は研修会・講習会に参加されての感想を書いていただきました。研修会・講習会はさまざまなことを学び、感じる機会です。そのときに感じ、考えたこと今後も会報を通じて書いていただきたいと思っています。

31号はもう少し早めにお届けしたかったのですが、遅れてしまいました。申し訳ありません。

12月13・14日に学会大会が開催されます。今年も講演、シンポジウム、研究発表と盛りだくさんのプログラムがあり、楽しみです。

会員相互の利益になるような情報等があればお知らせ下さい。（鈴木）

SPACE No. 31

日本臨床心理身体運動学会 会報第 31 号

2014 年 11 月 11 日発行

日本臨床心理身体運動学会

会 長 山中康裕

編集責任 鈴木 壯

事務局 〒541-0047

大阪市中央区淡路町 4-3-6 新元社内

TEL : 06-6221-2600

FAX : 06-6221-2611

E-mail : office@rinsinsin.jp